

【完結】紅き平和の使者

雪化粧

『マクドナルドのある国は戦争をしない』

その言葉に、少年は魅了された……。

※ずっと、昔にArcadia様で書かせていただいたギャグSSです。HDを整理してたら出て来たので、折角だから完結させてみようと思います。よろしくお願ひします。



目次

プロローグ『誕生』

一人の少年が地獄を歩いている。助けを求める声から耳を塞ぎ、伸ばされた手を払い除け、涙を浮かべる顔から目を逸らし、ただひたすらに歩き続ける。

ほんの数分前まで広がっていた平穏は赤い炎に塗りつぶされた。次々に呑み込まれていく命。少年もまた、死の時を迎えようとしていた。倒れ伏した彼の心は既に終わりを迎え入れるための仕度を整え、後は肉体の死を待つばかり。

その時だった。一人の男が現れた。少年の体を抱き上げて、彼は涙を流しながら微笑んだ。まるで、救われたのは自分だと言わんばかりの彼の笑顔に少年は惹きつけられた。

次に目が覚めた時、少年は病院にいた。そこで、自分を救い出した男から養子にならないかと誘われ、彼と共に生きる道を選んだ。病院から新しい家に向かう道すがら、男は自分を魔法使いだと語った。少年はその言葉を素直に呑み込んだ。彼がそう言うのなら、そうなのだろう。けれど、少年は魔法よりも、彼自身に憧れた。救い出してくれた時の、あの笑顔に――。

プロローグ 『誕生』

ある月の晩、男と少年は肩を並べて語り合った。

「——子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた」

そう、少年には紛れもなく正義の味方に見えた男は言った。

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

唇を尖らせる少年に、男は困ったような表情を浮かべる。

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなこと、もっと早くに気が付けば良かった」

「そっか。それじゃ、しょうがないな」

男の悲しげな顔を見つめながら、少年は言った。

「ああ、そうだね。本当にしょうがない」

その悲しげな顔を、笑顔にしたくて言った。

「うん、しょうがないから俺がやってやるよ。爺さんは大人だから無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせろって、爺さんの代わりに俺が」

——少しでも、世界を平和にしてみせるよ。

そう言い切る前に、男は微笑んだ。続きなんて聞くまでもないという顔だった。男、衛宮切嗣はそうか、と長く息を吸った。

「ああ——、安心した」

静かに瞼を閉じて、彼はその人生を終えた。そして、少年は願いを叶える方法を探した。

世界を平和にしたい。その少しでも手助けになることをしたい。

魔術は学ばなかった。魔術師だった切嗣が死に、教えてくれる者はいなかったし、切嗣は一度だけ話してくれた。魔術は争いを呼ぶ物だと……。

だから、魔術で世界は平和にならない。そう結論を下し、そして見つけた。

その言葉を——。

『マクドナルドのある国は戦争をしない』

その言葉に、少年、衛宮士郎は歓喜した。

「ついに見つけた……ッ!!」

そして、士郎はマクドナルドの象徴と呼べる存在、ドナルド・マクドナルドになりたいと願った。

そして、彼になるために体を鍛え、世話をしてくれる藤村の爺さんに頼み込み、学校に行く傍らでダンススクールと演劇教室に通い詰めた。

そして、高校二年生の冬休みに彼は泊まり込みで新しくドナルド・マクドナルドの役を務めるオーディションに向かう。そして、見事にドナルド・マクドナルドになることができた。

だが、悲劇が起こった。彼の住んでいた町、冬木市が消え去ったのだ。一説には、某国の攻撃だと言う声や、テロ組織の仕業だと言う声が後を絶たなかった。ニュースでは、局地的な大地震だったと識者が説明したが、納得できる人間はいなかった。だが、その事件も人々の記憶から忘れ去られ、真相が解明されないまま、いつしか歴史の闇の中へ消えていく。

ただ一人、士郎を除いて……。

そして、ドナルドとなった士郎はCMに出演し、ダイナミックなアクションができることでプロデューサーが考えたユニークで豪快なパフォーマンスを次々にこなし、動画共有サイトでは、一躍教祖様と呼ばれたり、カリスマの具現とまで謳われた。そして、海外でも評判となり、彼は海外のCMにも出演した。

彼は、少しでも世界が平和になるならと、語学の勉強も苦と思うことなく勉強し、あらゆる国で平和の呼びかけをしながら、パフォーマンスをしていった。

マクドナルドの収益は上がり、ドナルド士郎は社長とも懇意になった。ドナルド士郎の願いである、世界を平和にしたいと言う言葉を社長は真摯に受け止めた。世界中の紛争を止める様に、世界中のマクドナルドで呼びかけを行い。そして、ドナルド士郎は世界中を渡り歩いて、親を亡くした子供達や戦地の人達を元氣付けた。その溢れ出るカリスマによって、世界は少しずつ、変わっていった。

戦争は無くならない。

テロも無くならない。

盗みを働く者、殺人を犯す者もなくなる。

それでも、ドナルド士郎の活動は、世界に光を灯した。ドナルド士郎は50を過ぎるまで働き、引退後は彼が紛争地帯で出会った少年に後を任せた。少年もまた、ドナルドに憧れたのだ。

ドナルド士郎に代わって、世界の平和のために活動を続ける少年を見守り、ドナルド士郎はその後も本を書き、ドナルド士郎として培った演技力で俳優となり、そ

の印税や給料の殆どを世界平和のために寄付していった。

彼は知る由も無い。

ドナルド士郎は教祖と崇められ、時には狂気を孕み、時には神すら超越するとまるで語り、信仰する動画共有サイトの閲覧者達を――。

その人々は、世界中に存在し、彼は死後もその信仰により世界に迎え入れられるのだった。

世界に笑顔をくれた英雄、ドナルド・マクドナルドとして彼は英霊の座についた。そして、初めて英霊として召喚されたのは……、遙か空の上だった。

紡ぐ言葉はかつての口癖、

「なんでさ……」

当時はドナルドの動画に嵌まり込んでました（*
ω、*）